

大阪薬科大学広報委員会

ベラドンナ

ヨーロッパ中・南部に自生し、また各国で栽培されるナス科の多年生草で我が国でもよく生育する。本学でも中庭の温室用ポイラー室の南に二株植えてあり、毎年初夏に紫褐色の花を咲かせ、夏～秋に黒紫色球形の漿果を着ける。根をベラドンナ根、葉をベラドンナ葉と呼び、いずれも鎮痛、鎮痙薬として重要な生薬である。学名は *Atropa belladonna* L. で、種名の *belladonna* は *bella* (美しい)、*donna* (女性) に由来している。その語源については漿果の液汁が紅紫色をしているので女性が頬紅として用い美しく化粧したことによるとする説と、薬汁を滴めて点眼すると散瞳作用により瞳が大きくなり美人に見えるとする説がある。後者の説はその含有成分の薬理的な面と合致し興味があるが、美しくなるとは云え瞳孔が開いてしまう当人にとっては大変なことである。本植物はナス科の成分の特徴の一つである *tropine* 系アルカロイド、*hyoscyamine*、*scopolamine*、*belladonnine* などを含み、主としてベラドンナエキスの原料とされるほか、*l-hyoscyamine*、*atropine* (*dl-hyoscyamine*) の抽出原料とされる。主有効成分である *l-hyoscyamine* は中枢



神経系に初め興奮、後に麻痺的に作用し、中毒初期には狂躁状態を呈すると云われる。ベラドンナの属名である *Atropa* は *Atropos* (運命の女神) に由来しており、この毒性に因る命名と思われる。ドイツでこの植物の呼び名の一つに *Irrbeere* があるがこれも毒性から付けられた名前であろう。これと同じ意味で付けられた名前の植物は日本にもあり、チョウセンアサガオがキチガイナスビとも云われ、生薬ロートコンの原植物がハシリドコロ(食べると狂って走りまわることによる)と命名されている。いずれもナス科の植物で *hyoscyamine* を含んでいる。このアルカロイドの著しい生薬作用の一つに前述の *belladonna* 語源説の一つとなっている瞳孔散大作用があるが、ベラドンナ、ヒヨス、ダツラ、ハシリドコロ等これらのアルカロイドを含有する植物の取りあつかいには気を付ける必要があり、汁液の着いた手で目をこすったりしないことである。



(小澤 貢)

● 施設紹介 ●

薬草園



園長
太田長世

本学薬草園の春のきざしは、3月のはじめ、ひも状4弁で鮮橙黄色の花をひろくマンサクにはじまって、純白で可憐なオウレン、目もさめるような黄色のレンギョウとサンシュユの花が一杯に咲く。3月から4月にかけてはバラ科木本植物のアンズ、ウメ、モモ、サクラ、大学の山庭から移したカリンのうす桃色の花は春の陽にすけて青空にとけてゆく。痕びたたくずまいのアマガサユリ洋風のアリュームとスマレ、スイセンの仲間たち、ムラサキハシロイ、シャクヤク、薬用種のボタン等、楚々艶然と競う。東京の小石川植物園入口近くにあるフジの作り方を真似て、せいぜい2mぐらいの高さにしたてている数本の長崎一才と称するフジは、今年も見事な紫の房を沢山つけてくれた。5月、アサクラザンショウ、ヤマモモ、果肉がパイナップルのかおりがして甘く美味

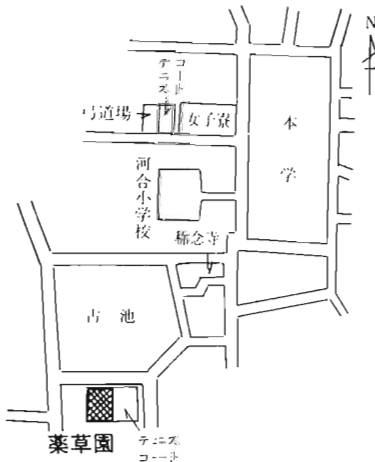
しいフトモモ科のフェイジョア、ユズ、ダイダイ、大学に古くからあった大きな木を移植するのに心配だったバクチノキ、キハダ等の若葉の緑、オリンピアの伸々のうち、女神ヘラーが天上から落した儼子が花となったという強心剤のジギタリスは長い抽苔上に紅紫色筒形の花を



ホンバオケラ
Atractylodes lancea DC. (Compositae)



スイカズラ
Lonicera japonica Thunb. (Caprifoliaceae)



穂状にびっしりつけて、微風にゆらけている姿等、葉に用いることなどを忘れさせる。この頃から雑草との戦いが本格的に展開する。梅雨をすぎ真夏に至るまで、アマチャ、エビスグサ、ハブソウ、クチナシペラドンナ、ダツラ、マオウ等、花をつけるものが多い。中国、韓国に



キササゲ
Catalpa ovata L. (Bignoniaceae)



ジギタリス
Digitalis purpurea L. (Scrophulariaceae)



ハッカ
Mentha arvensis L. var. *piperascens* Ho. (Labiatae)

野生するキキョウの花は日本のものとくらべて濃い色であると聞か、どうであろうか。本園では夏まえから涼しそうな花をつけ、9月中旬頃までつきつきと咲き、思いのほか花期は長い。ウイキョウ、ウコン、コガネバナ、ハッカ、トロロアオイのクリーム色が鮮やかな大輪花は夏の終りを彩るにふさわしい。秋のおとずれはオミナヘシ、ワレモコウ、オケラ、オオグルマ、ヤマトリカブト、リンドウ等の花で知り、ミシマサイコのちいさな花は10月に入っても咲きつづけてくれる。晩秋、赤紫色の花の中央から真赤な雌蕊の柱頭を見せるサフランは



ヨウシュチョウセンアサガオ
Datura tatula L. (Solanaceae)



オリーブノキ
Olea europaea L. (Oleaceae)



トウキ
Angelica acutiloba Kitagawa (Umbelliferae)

凋萎させてしまうには余りに惜しい。ようやく冬の気配が濃い葉草園では多くの草々が翌春の準備にとりかゝる。葉草園面積2021㎡, 82科, 約250種。益々の充実を期している。

本学の葉草園は大学昇格後、主に真里谷登代先生が同好の学生を指導されつゝ標本植物の育成に努力され、昭和52年、葉園狭小のため学外に用地を購入して現在地の松原市河合町45, 46番地に移転した。当初の計画では現在の倍以上の面積があてられていたが、約半分がテニスコートになったため、ようやく他大学並の広さに近づい

た感があったのにと残念に思っている。本園はもと水田であったため土地が低い。移転にあたっては上をずいぶん入れて圃場としたが、いまだ低地の不利があり、年々土を追加して、よりよい圃場にするべく努力している。

一方、学内の温室は昭和53年8月、旧來のものから建て替えられた。広さは前のものとさして変化はなく、68.4㎡であるが、重油を燃料として暖をとる、天井窓の自動開閉装置で温度を調節することが可能となったので、従来のように厳冬の夜明けの如く-5°Cを切るようなこともなくなり、約10°Cを保てることができるよう



ミシマサイコ
Bupleurum falcatum L. (Umbelliferae)



クララ
Sophora flavescens Aiton (Leguminosae)



キハダ
Phellodendron amurense Rup. (Rutaceae)



ハマナス
Rosa rugosa Thunb. (Rosaceae)



サイカチ
Gleditsia japonica Miq. (Leguminosae)



オオレン
Coptis japonica Makino (Ranunculaceae)

になった。ただ、熱帯性の重要な薬用植物中には、常に高い湿度と温度が必要なものが多いので厄介であるが、一般的なものは育成できるようになった。昨年は三尺バナナが果実の房を沢山つけ、コショウ、バニラ、コー

ヒ、カカオ、インドジャボク、キダチチョウセンアサガオ、パパイヤも元気に育ってきた。昨年8月、中国で得た種子のうち、キササゲ属の *Catalpa bungei* A. Meyer トウキササゲではないかと大きくなるのを楽しみにして



ツルビヤクブ
Stemona japonica Miq.
(Stemonaceae)



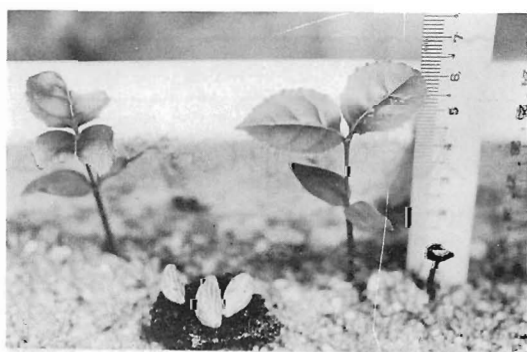
ヨウシュヤマゴボウ
Phytolaca americana L.
(Phytolaccaeae)



キナ(右) *Chinchona succirubra*
Pa. et Kl. (Rubiaceae)
カカオ(左) *Theobroma cacao*
L. (Sterculiaceae)



ドクダミ
Houttuynia cordata Thunb. (Saururaceae)



キンモクセイ (桂花子)
Osmanthus aurantiacus Nakai (Oleaceae)



トウキササゲ
Catalpa bungei C. A. Mey? (Bignoniaceae)



インドジャボク
Rauwolfia serpentina Ben. (Apocynaceae)

いるもの、繖形科のいくつかの種子、桂花子とよんでいるキンモクセイ等が発芽し、成長している様子は望外のよるこびである。

近年、全国の薬学系大学で薬用植物園が重要視され、敷地の拡張、専任従事者の設置と増員、関係施設の増強、植物園協会への加入等によって、教育のための基本標本植物と研究資料植物の充実をはかろうとする方向に進みつゝある。現実的には大学間に薬園の規模、とり組み方に相当の格差がみられることから、日本私立薬科大学協会の生薬学教科検討委員会では、たびたび各大学関

係者が集り、薬園の基準等について検討を行っている。われわれ本学の関係者は、薬園の教育上の重要性の認識の上になつて、一層の努力をと考えている。本学学生の利用度認識度は低く、薬園に出入する学生はテニスのボールを捜すために圃場に入っているもの以外に姿を見ることは極めてすくない。前に記した花暦のように、種々のものが観察できるので、休みの時間等、大いに利用されるよう望む次第である。現在の薬草園関係者は次の如くである。薬草園委員：太田長世，小澤 貢，馬場きみ江。技術員：島田順一。



デリス
Derris elliptica Benth (Leguminosae)



ゲットウ
Alpinia speciosa K. Sch. (Zingiberaceae)

大学会館の着工について

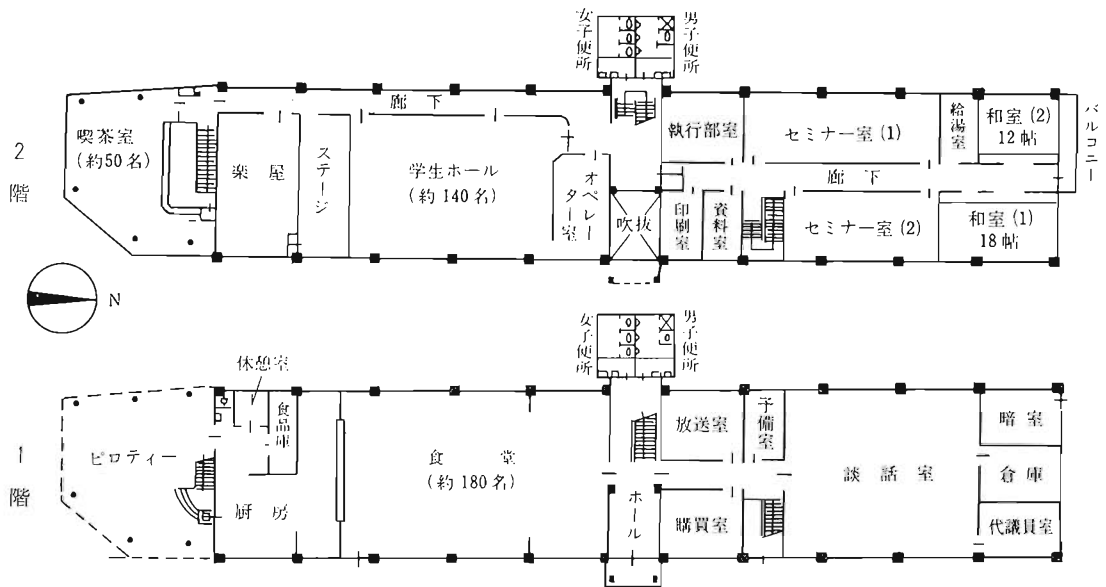
事務局

大学会館整備のため、昨年末以来学内の意見を取纏め、一方においては、既存建物（C棟及びクラブ室）の耐用診断を実施、その結果により、計画された各室の配置、面積等について、関係各部との細部打合せ、調整を進めてきましたが、先般来実施設計（改修、増築）の段階に入っております。今後の工程としては、設計完了、関係官庁の建築許可手続を経て、7月末施工業者決定、

8月初旬着工、12月末竣工、竣工検査及び内部設備の搬入取付を行い、1月末頃には、開館の運びに至ることを予定しています。

なお、施工期間（8月から12月）中は、施行建物の周辺及び資材置場等の区域について、不便をおかけすることとなりますが、ご協力の程お願いします。





●研究室だより●

薬剤学(Ⅱ)教室

教授 森坂 勝昭



教授 森坂勝昭(中央)
副手 神谷悦子(左) 助手 森本一洋(右)

「貴君は家も近いことだから大阪薬大に行き給え」との主任教授の一言で私の就職先は簡単に決ってしまいました。自分は将来一体何で飯を喰ったらよいのかと真剣に考えてもなかったが、大学に勤める柄ではないと心得ていたので、一時の腰掛けのつもりで薬品分析助手を拜命し高見の里に通い始めた。今から30年余り前のことである。しかし薬科大学と云うのにガスが来ていない、研究費もないのも同然、しかも月給も企業の半分位とあって、これでは先行きが思わしくないと考えた。それでも

乞食と先生は何々とかで、毎日通年実習に追われて忙しく過すうちに、ついずるずると腰を落ち着けてしまった具合、実習用の蒸留水を重い酢酸びんに入れて担ぎ運んだり、教室で0.1NKMnO₄ 1mlは5.5 mgのFeに対応すると講義していた頃を想い出すと今もって懐かしい。17年経って突然に薬品分析から薬剤にトレードされる身となり、京大薬剤学の研究室に戻されて一年余り研修させられることになった。とにかく一からやり直しである。私の大学時代には薬剤学の講座はまだなかったし、講義も半年週1時間、調剤学を習った程度であったが、何時の間にか薬剤学は体系づけられて薬学の主流の一つに伸び上ってきた感であった。新薬の開発が盛んになるとともに、既成薬を含めて製剤としての有効性と安全性が問われる時代になり、それには動物実験の必要性が大となり、これに伴う生物学的また物理化学的考察が必須となってきた。そこでこれまで全く無縁だったラット等を用いる動物実験が私の仕事に相成った。私について中元講師が同じく研修に出たが、彼の帰るのを待って研究室を店開きすることになったと思っている。中元講師は武枝助手と共に独立分家しているが、別研究室とは私は考えていない。私に直属の森本助手、神谷副手を含めて私以下5名はまだ不完全な者の集りであり、自分たちのためと云うより大学の将来のために考えて一層の努力をしなければならない。

私共の仕事は動物実験を主体としたものであって、これに微生物、物理化学の各研究室との共同研究も加って八百屋の如きテーマで行なっているが、院生3名、研究生数名、これに特別実習生も加って毎日騒然と仕事を行なっている。



昭和56年度会計の決算について

事務局長 小 村 俊 夫

学校法人大阪薬科大学の会計処理の内容については、毎年度2回（10月及び年度経過後の5月）公認会計士による監査を受けていますが、更に56年度決算書に基づき、法人監事の経理全般にわたる監査を去る5月26日に受けたのち、5月28日の理事会及び評議員会において審議の結果、承認されました。

また、関係官庁（文部省、私学振興財団）へも、決算関係書類の提出をしております。

つきに、消費収支計算書総括表について予算に対する決算との差異等の概略を説明します。

（収入の部）

1. 学生納付金について

決算額9億9226万円、予算額との差異2256万円増は、予算積算員数と入学者実員数の差増によるもの。

2. 手数料について

決算額5665万円余、予算額との差異250万円余増は、

これも前述同様、予算積算入学志願者見込数と志願者実数の差増、再試、単獲等受験者数の差増によるもの。

3. 寄附金について

決算額245万円余は、教育研究用機器及び図書等の寄贈によるもの。

4. 補助金について

決算額3億9123万円余、予算額との差異1123万円余増は、研究設備（日立二重収束GC質量分析計）及び経常経費補助金の差増によるもの。

5. 資産運用収入について

決算額1億540万円余、予算額との差異1740万円余増は、銀行利息の変動見込に伴う資金運用措置によるもの。

6. 事業収入について

決算額1488万円余、予算額との差異366万円余減は、学生寮の入居者数及び給食数の減によるもの。

消費収支計算書総括表

昭和56年4月1日から
昭和57年3月31日まで

（単位円）

〔消費収入の部〕

〔消費支出の部〕

科 目	予 算	決 算	差 異	科 目	予 算	決 算	差 異
学生納付金	969,700,000	992,260,000	△ 22,560,000	人 件 費	722,430,000	716,980,708	5,449,292
手 数 料	54,150,000	56,656,850	△ 2,506,850	教育研究経費	374,370,000	329,613,404	44,756,596
寄 付 金	0	2,455,892	△ 2,455,892	管 理 経 費	119,940,000	87,544,463	32,395,537
補 助 金	380,000,000	391,234,000	△ 11,234,000	借入金等利息	28,000,000	31,594,312	△ 3,594,312
資産運用収入	88,000,000	105,407,670	△ 17,407,670	資産処分差額		339,287	△ 339,287
事業収入	18,550,000	14,885,000	3,665,000	〔予 備 費〕	(0)		
雑収入	3,000,000	4,953,780	△ 1,953,780		10,000,000		10,000,000
帰属収入合計	1,513,400,000	1,567,853,192	△ 54,453,192	消費支出の部 合 計	1,254,740,000	1,166,072,174	88,667,826
基本金組入額 合 計	△ 146,020,000	△ 124,451,549	△ 21,568,451	当年度消費 収入超過額	112,640,000	277,329,469	—
消費収入の部 合 計	1,367,380,000	1,443,401,643	△ 76,021,643	前年度繰越消費 支出超過額	169,940,000	133,083,988	—
				翌年度繰越消費 収入超過額	0	144,245,481	—
				翌年度繰越消費 支出超過額	57,300,000	0	—

7. 雑収入について

決算額495万円余、予算額との差異195万円余増は、入学試験募集要項、学生証等諸証明の発行数等の増によるもの。

以上が収入の部における科目別の増減事由の概要ですが、帰属収入の合計は、15億6785万円余となり、基本金組入額1億2445万円余を控除すると、収入合計は、14億4340万円余となります。

(支出の部)

1. 人件費について

決算額7億1638万円余、予算額との差異544万円余減は、人事異動その他によるもの。

2. 教育研究経費について

決算額3億2961万円余、予算額との差異4475万円余

減は、光熱水費の値上率見込の差その他印刷費、修繕費等によるもの。

3. 管理経費について

決算額8754万円余、予算額との差異3239万円余減は、建物等改修計画の翌年度へのずれ込み、光熱水費の値上率及び節減によるもの。

4. 借入金等利息について

研究棟等建設のため、私学振興財団等よりの借入金に対する支払利息。

以上が支出の部の概要であり、支出合計は、11億6607万円余となります。

従って、当年度は、2億7732万円余の収入超過となりますが、前年度繰越支出超過額1億3308万円余を差引き翌年度へ繰越できる収入超過額は、1億4424万円余という結果になります。

創立80周年記念 事業委員会決まる

明後年(昭和59年)に迎える創立80周年を記念して、理事会では、大学会館の増改修、記念史(誌)の発刊など一連の事業を、『創立80周年記念事業委員会』の組織下で進めて行くことに決定し、下記の委員を委嘱してその下に次の三つの実行委員会が設置されることとなった。

創立80周年記念事業委員会

最高顧問 石黒理事 委員長 堀田理事

委員 森坂理事, 森本理事, 曾根理事, 沢木理事
実行委員会

土地建物関係, 記念史(誌)・式典関係, 大学院関係
(堀田記)

学生部だより

■父兄会役員改選さる

去る6月5日(土)午後、大会議室において昭和57年度父兄会評議員会が開催され、父兄会会則の一部改正および昭和57年度の役員選出が行なわれた。主な新役員は次の通り。なお評議員の氏名は昭和57年度名簿(住所録)を御覧いただきたい。(敬称省略)

会 長 永井迪夫

副 会 長 磯野尚三, 品川知子

会 計 堀内季雄, 田中貞夫

会計監査 岩井孝明, 原田宏吉

委 員 多幡達夫, 半井利弥, 木本ちさと, 佐々木千代恵, 山本 久

会則一部改正では役員の中に会計監査2名が加えられたことと、新年度事業の活潑化、大学会館大改築工事内装費補助、父兄会奨学金制度の発足、父兄会誌の発行などによる予算の膨脹に対処するため、昭和43年以来据え置かれてきた会費を来年度入学生から月1,000円に増額することが決定された。

■父兄会奨学金制度について

本年4月入学式当日に開催された昭和57年度父兄会総会において予算が承認されていた父兄会奨学援助金によって、本年度から大阪薬科大学父兄会奨学金制度が発足することになった。父兄会評議員会に於て同規程が承認され本年度入学生から適用される。

この奨学金は本学部学生であって、日本育英会およびその他の奨学機関の奨学生でない者のうち、学力・人物ともに優秀で入学後家計支持者の死亡、または天災あるいはその他の事由により学資の支弁が困難となったと認められる者に支給される。

奨学金の額は年間12万円で、年3回に分割支給される給付奨学金であり、返還の必要はない。支給期間は1ヵ年を原則とする。出願受付は毎年1回6月に行うが、年の途中で前記条件に該当するような事故が発生した場合は随時受付ける。今年度の受付は6月21日から7月5日までとする。採用奨学生の数は年間10名以内である。奨学生の選考は学生部委員会で行い、学長が父兄会長の了解を得て決定する。奨学金に関する事務は学生課が行うことになっている。詳細を知りたい方は学生課に申し出て下さい。



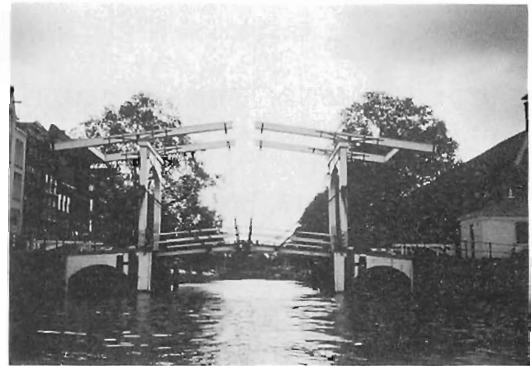
ハンガリー半群論国際会議に出席して

教授 吉 田 嶺 吉

Hungary での国際会議で発表しませんかという連絡をもらったのは一昨年(1987)の10月であった。一体に Hungary という国は Europe では 2 流国ではあるが、私の研究する代数学では、日本などよりずっと積極的な姿勢をとっており、自国の学者で、代数学の中から Universally に業績をあげた分野：半群論、束論、Universal algebra の 3 つをとりあげ、その 3 つの国際会議を循環的に開催している国である。日本人は半群論に活発な業績をあげている関係上、今までに 3 名が招待講演に招かれていて、私の場合は一般講演ではあったが、私にとってもはじめての海外での発表であり、教授会了承を得て、訪欧することになった。

いざ訪欧の計画を立てることになって驚いたことには、航空運賃に随分差があることであった。単独の Europe 往復運賃 74 万円に対し、旅行業者の計画する団体分乗搭乗券をうまく購入すると 31 万円で行けることが分かり、国際会議の日程とらみあわせてさっそくそんな分乗搭乗券で訪欧することにした。お蔭で Amsterdam で 3 時間と、帰路 Swiss で 1 日、Paris で 1 日の余裕ができることになった。出発までは、あまり人々の訪れない東欧圏へ入ることは興味津々でもあり、何となくオッカナイ気がしたものであった。

ところで日本から Hungary へ直行便はないため、Amsterdam で乗換えて、Budapest へ入り、Paris から帰国することにした。8 月 21 日伊丹発、成田で乗り換え、Anchorage 経由一路 Amsterdam へ。航空機の食事はなる



Amsterdam のハネ橋

ほどゴチソウだったが、夕食が 23 時にならねば出てこなかったのには少々びっくり、朝食を 12 時に食べたきりだったので、空腹でかえって胃が少し変で、少ししか食べられない。もともと飛行機ははじめてのことでもあり、眠れなくては困ると思って催眠剤を飲んだら、とにかく一応は眠れたので、Amsterdam 到着後荷物をロッカーにほり込んで、空港バスで中央駅へ。国際列車 2、3 本の写真を撮り、遊覧船で街を一周、街中縦横に堀が通っているが、下水が完備しているのか、少しもドブ臭くなく、海に近いためか水鳥が遊んでいたり、ハネ橋があったり、同じ水の都とはいいいながら大阪よりずっとムードがあふれていた。Amsterdam から Budapest までは約 2 時間、下界が見えてきて、大きな川が流れていると思ったらドナウ川だった。間もなく Budapest 空港へ着陸。

さてガイドブックに街の中心部まで空港バスがあると書いてあったので、バスに乗ったところ、街までの途中の地下鉄の終点で降ろされてしまい、運転手はメトロに乗れという。出札口で地図を見せ、街の中心部のこの辺に行きたいがといったが、切符を売ってくれないので困っていたら Austria のおばさんが来て、助けてもらった。何のことはない、あるところまでは均一料金で、改札口でコインを放り込むだけでよかったのである。そのおばさんについていって一緒にメトロに乗り、同じ駅で降りる。Budapest のホテルは日本から予約してあったのだが、おばさんは「自分は向うの階段をあがるが、あ



水都 Amsterdam

あなたはこの階段をあがって聞いてごらん」と大変親切に教えてくれた。なるほど階段の上で青年に聞いたら、すぐに分った。Szeged でも Paris でもオバさんに道を尋ねたが、オバさんというのはどこでも大変親切である。

ホテルに着いて、夕食をとりレストランへ行くと、隅に赤いチョッキを着た楽士が5、6名いて、懸命に音楽を奏でてくれる。そうだ、ここは Liszt の「ハンガリア狂詩曲」の曲だったのだ。

さて Hungary は日本と比べて面積が狭、人口が稀の農業国で——西瓜とトマトがおいしかった——、第2次世界大戦と、1943年の社会主義革命戦争とを経たため、経済復興の速度は日本より遅れており、日本でいえば丁度昭和10年頃の世相を思い出させるものがあり、公衆電話が故障したままだったり、駅のガラスが割れたままになっていたりしたが、かえて物価が安く、人々は非常に親切であった。

ところで Hungary の首都 Budapest は東欧圏で最も美しい都市といわれ、北から南へ流れる Donau 川の右岸は古い街ブダ、左岸は新しい街ベストで、13世紀に統合された。右岸に海拔 200m ほどの丘があり、丘の上には王の戴冠式を行う教会、19世紀に市民が自衛していた漁夫のトリデなどがあり、丘の上から川を隔てて国会議事堂を望む展望は天下一品である。翌朝郵便局に用事があったが、社会主義国のせいか日曜なのに朝の7時から開局していたのは有難かった。市電も1回12円という安さ、会議の催される Szeged の街は Budapest から東南へ列車で2時間半のところであり、始発駅は西駅（東京でいえば上野駅にあたる）から。ところでこの駅で大分舞々コンコンさせられてしまった。つまり空港には英語が書いてあるが、この駅には Hungary 語しか書いてないので、適当な出口口で「Szeged まで」といったが、その窓口ではなく、3つ目の窓口で、指を5本出して左を指さしてくれたので、やっと切符を買うことができた。もっともウロウロ振り舞わされるのも、後で思い



Budapest 経済大 Lajos 教授と化学研究所入口にて

出せば一人旅の楽しさではあるが……。

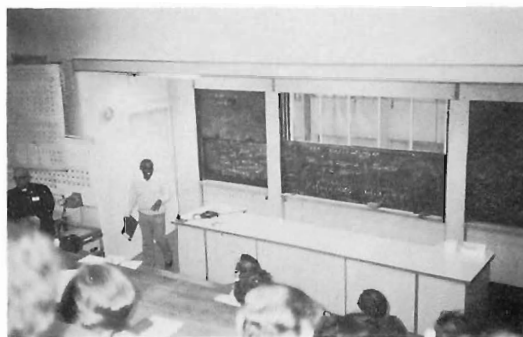
Szeged 駅に到着したら、主催側が出迎えてくれて、同じ列車から下車したソ連の人達と一緒に5台の乗用車に分乗、ホテルで荷物を置いて、直ちに Students' Hostel での登録までつれて行ってもらって、そこで出発まで日本から3度ほど手紙を往復した実行委員のポラック教授に「Prof. Yoshida, よく来てくれた」と欲待された。

Szeged は Donau 川の支流 Tisza 川に面する人口17万の古い静かな田舎街といったところ、割当てられたティサ Hotel も戦前の古い建物で、部屋も広く朝食付4300円しか請求されなかった。

日本からの参加者は私と京都産大の伊藤正美氏と2人だけで、2人は別々に出発、別々に帰国し、Szeged でだけ一緒だったわけだったが、翌24日の朝ホテルへ尋ねてきてくれ、会場の化学研究所へ向った。会議は Lenin-grad 大学名誉教授 Lyapin 氏の開会の辞ではじまり、24、25、26、28日の午前10名の人々の50分の招待講演



Donau 川右岸から望んだ Budapest 前方の古風な建物は国会議事堂



インド Kerala 大 Nambooripad 教授の招待講演



Pollák 教授, Lisbon 大 Reis さんと植物園にて



Tennessee 大名譽教授 Miller 氏の Problem Session.

があり、その他の時間に35名の人人々の20分の一般講演が行われた。何しろ参加者は世界各国から出席してきていることではあり、発表も英語、独語、Hungary 語、ロシア語があり、特にユーゴスラビア語は実行委員のMarki 教授が即時通訳をした。参加者は東欧圏で行われたためもあり、東欧圏 (Hungary 20名, ソ連 20名, チェコ 20名, 東独, ユーゴ, ブルガリア) から56名, その他の国 (米国, イタリア, フランス, 西独, 日本他) から23名と非常な盛会であった。2日目の午前私に座長をするように予定していたようであるが、国際会議ははじめてで様子が多分なくもあり、会話にも弱いので、他の方に



Leningrad 大名譽教授 Lyapin 氏の Problem Session.

交代してもらった。自分の講演は2日目の午後に割当てられており、「逆半群の部分直積表現」と題して英語で発表をおえた。3日目の午後は舞台を植物園の木蔭に移して、屋外で10数名の人達の Problem Session があり、8月下旬といっても9月下旬のような涼しさで、木蔭で座っておれば、背広の上衣を着ていても、少しも暑いとは思えなかった。それでも今まで論文やら著書やらで名前を知っていた Lyapin, Shevrin (ソ連), Miller, Meakin (米国), Howie (英国), Reilly (カナダ), Nambooripad (インド) の各教授にはじめてお目にかかったり、Problem Session の前に Miller 教授やら Shevrin 教授から「あなたの論文を読んだよ」と声をかけられ、私のような弱者でも覚えてもらえて感激した。

会場のあるドーム広場は Szeged の中心部にあり、すぐ前に13世紀の尖塔をもった古い教会があり、その教会と化学研究所の間の広場で、毎年夏に1ヵ月野外フェスティバルとしてオペラ、劇、バレエなどが行われるそうである。



13世紀の尖塔をもつ Szeged の教会



ソ連 Ural 大 Shevrin 教授と

28日の夜は Budapest まで帰ってきて1泊したが、ここで困ったことになった。それは Hungary の貨幣を両替しすぎたことである。Szeged の銀行でドルに戻してもらおうとすると、Budapest の国立銀行へ行ってくれということなので、朝ホテルから日本大使館へ電話で聞いてみると、そんな場合は半分しか戻らないという話、これは4万円ほど損になってしまったわいと、銀行へ急いだ。しかし部長級の紳士が面会してくれて、会議の招待状を見て信用したのか案外あっさり全額ドルに戻してもらえてホッとした。



Szeged 駅

さて Zurich までは Wiener Walzer Exp. という国際列車を利用することにした。この列車は Rumania の黒海沿岸にある Constantza を第1日の20時に出発、Bucharest を経由して、第2日の昼すぎに Budapest 東駅に到着、私はそこから乗車したわけであるが、14時55分発、Wien, Salzburg, Innsbruck を通って Zurich から Basel まで4ヵ国を通過する国際列車で、寝台車はウィーンからでないことと連結しないため、まず Basel までの通しの2等の客車に乗り込んだ。Europe の列車には片側に片寄せで通路があり、反対側に3人ずつ向い合った6人部屋が多いが、この車輛もそうっており、デッキのすぐ近くの Compartment に入ろうとしたところ、中にいたおばあさん2人が「あなたは Compartment の入口の名札入れに名前が書いてもらってあるか？ なければダメですよ」といわれたので、2つほど先の Compartment で名札入れに3名しか書いてない Compartment をのぞいた。若い男(N氏)が「Zurich まで、1人か、それならここへ座りなさい」と1つの席を指さしてくれたのでやっとな安心、ところでそのN氏は若い夫婦づれで、2人とも Hungary 人だが Zurich で働いており、1週間休暇をもらって帰郷しての帰りの由、私が国際列車に乗るのが楽しみでこの列車を選んだと話すと、発車した直後 Donau 川を渡る景色がよいから、窓際へきて写真を撮られたの、Donau 川に接近して快走するところへくると、向

う岸はチェコだの、食堂車へ行ってみてみたいといえれば一緒に連れて行ってきて、残った Hungary の通貨で食べられるものを調べてくれたりした。日本では駅弁が非常に普及しているが、外国ではそうでないらしく、大きなアルミの弁当箱を持っていて、そのN氏からおいしいカツサンドをゴチソウになったりした。3時間ほどで Austria との国境駅に到着。ここでも窓際に呼んでもらって説明してもらった。露路1つ隔てて両国の駅舎が2軒建っており、はじめに一度停車して降車客を降ろすと、20mほど前進、そこであらかじめ旅券を提出してあった乗客が1人ずつ名前を呼びあげられて乗車してきた。やがて Wien に到着。N氏は窓際へ私を呼んで後3輛だけが切り放されて、向うのホームに停っている列車のうしろに増結されるんだよと説明、大体この列車は Constantza から Budapest まで、Budapest から Wien まで、Wien から Basel までの3列車からなり、ごく一部の車輛だけが空中サーカスのように次から次へと切ったりつながれたりして走ってゆくようになっているのであった。



国際列車 Wiener-Walzer 号に乗車

国際列車の2等寝台に一度は乗ってみたかったのであるが、Wien 停車中の40分を利用して、寝台車の車掌をつかまえて交渉、空席があったのでうまく乗せてもらえることになった。車体は大分古く、日本の2等寝台をもう少しゆったりとスペースがとれていると思えばよい。片側通路は日本と同じだが、それと直角に3つずつ寝台が設備されており、しかもその3人が入ってしまうと完全に個室になって、鍵がかけられるようになっている。欠点は洗面所に湯が出ないことである。しかも私の乗ったシーズンは設備があったのかなかったのか冷房がなくて、3段の上段は暑くて、洗面所へ行って上半身水でふいてきて、一息ついた。しかし走っているうちに夜半からは涼しくなってきた。Wien を出発してしばらくすると車掌が明朝の駅弁の予約をとりきたので、思い出に頼むことにした。(食堂車は Austria の国境駅で分離



右のピークが Jungfrau, 左の絶壁が Eiger 北壁

されてもう連結されていなかった。) やがて Salzburg を通過, Salzburg といえば「その近くに塩山があり, 塩山に穴を掘って小枝を入れて相当期間置いておいて出すと, 小枝に塩の結晶が附着して, キラキラと輝き非常にきれいな小枝になっているが, 人間の恋愛感情もそんなものである」と学生時代に読んだ Stendhal の「恋愛論」に書いてあったことを思い出しながら, 旅の疲れか, アルプスの長距離トンネル Arlberg もいつの間にか通過, 熟睡して目が覚めれば快晴の Swiss へ入っていた。やがて Sargans から積み込んだ予約弁当をお盆にのせて配給される。袋入りのネスコーヒー1人分, 熱湯, パン, チーズ, ネーブル, ケーキなどちょっと楽しい朝食だった。8時23分 Zurich 着, 通貨の両替と Jungfrau joch までの切符を購入。国鉄と登山鉄道との連絡切符は, 2つのコースのどちらから登って, どちらへ降りてもよく, 途中下車も可能, 1か月通用の便利な切符である。雪山を左に右に見ながら, いくつもの湖畔をぬっての Interlaken までの3時間は瞬間であった。ところでこの日は一日中全くの快晴に恵まれそうなので, この日に Joch まで登って下山し Interlaken に宿泊することにし, 乗換えの間に電話でホテルを予約しておいた。真白に輝く Jungfrau を前面に見ながら一步一步登ってゆく登山電車の快適さは, 夏の信州より格段に素晴らしい。Scheidigg に近づいた時, 隣の英国の大学生が「Eiger」と指さしてくれたので, 幾多の登山家の生命を



Paris で泊った Mont-Thabot Hotel

奪ったあのアイガー北壁がここにあることを始めて知った。写真でも写したが, その壮絶な絶壁の物凄さはやはり百聞は一見にしかずというべきか, Scheidigg からの最後のケーブルはトンネルの中で一時停車して下車させ, Eiger 北壁にあけたガラスの窓から外をのぞかせてくれる。やがて終点 Joch に到着, そこから Jungfrau の頂上は手にとるように見えているが, 装備十分の登山家でないと手に負えない。次の日は同じコースを Zurich まで戻り, 空路パリへ。

Paris では旅行者者に世話しもらったホテルに泊る。昔の映画「パリ祭」「パリの屋根の下」を思い出させるような古い建物であったが, 持主が日本人で, 受付にも若い邦人がいたりして, 語学に堪能でない者にはやはり便利であった。

人間というものは勝手なもので, 10日もゴハンを食べていないとゴハンを食べたくなってくるもので, 夕食は邦人経営の日本料理店へ行って, サシミ定食を食べた。急須一杯の日本茶が大変郷愁を感じさせてくれた。翌日午前中はパリ市内遊覧バスに乗り, 日本語のイヤホンがついていて, 下車箇所は1ヵ所しかなく, 10数箇所を3時間で案内してくれる。私にとって感銘深かったのはやはり, フランス革命に関係のあるバスティーユ広場と, ルイ16世がギロチンで首を切られたコンコルド広場だった。午後は国際列車を写しに北駅へ行った。Moscow まで2泊3日で走る「東西横断」急行が入線してくる。16時21分発車, 翌朝 Berlin, 次いで Warsaw を経由, 3日目の15時に Moscow に到着するはずである。次いで急行「北国」が入線, これは翌朝 Copenhagen で接続して, 翌日の18時前 Stockholm へ到着する。国境を越えて走る国際列車の多いのも Europe ならではの光景だが, 航空機に旅客を奪われつつある今日, これらの列車はいつまで生き残れるであろうか? 鉄道の命脈の長からんことを願いつつ, 次の日 Paris 発空路帰国の途についた。

最後に, 学長の堀田先生および海外出張を認めて下さった教授, 理事各位に深く感謝の意を表する次第です。



Paris 北駅



学報の編集をかえりみて

教授 水谷 泰久

学内報を希望する声はかなり前から聞かれていた。それが具体化しはじめたのはおよそ2年前、平野先生が学長事務取扱のときで、当時図書館の「杉田課長にやってみようと思う」との相談を受けた頃である。そして、昭和55年7月の拡大教授会で学内報発行が決定した。しかし、この時はまさか筆者が広報委員長を命ぜられるとは思っていなかった。その後、学長事務取扱の交代によっていろいろの曲折があり、ようやくこの年の12月に入って広報委員会が、委員長は図書館長とし、委員は教務部、学生部両委員から各1名と、事務局から庶務課長と図書課長の2名の計4名で構成することになった。そして、それぞれ碓井先生、赤木先生と浅野課長、杉田課長の委員が決まったのはもう昭和55年の暮であった。

何事も始めが大切である。ことに、今後永く続けてゆこうとする学内報にとっては創刊号が特に重要である。今まで編集という仕事には携わったことがなかったので、正直なところ非常に不安であった。堀田先生は55年度内に創刊号を希望されたが、年度末になることでもあり、自信もなかったので、56年度から発足することにした。これは、幸運にも堀田先生の正式学長就任と期を一にした「創刊の辞」でスタートすることになった次第である。

紙名は2、3の候補から、題字を含めて学長に決めていただいた。発行責任者名は広報委員会とし、版組は1行25字の横2段組とすることなどのほか、できるだけ多くの写真を入れるなどして親しみやすく読みやすい紙面とすることを心がけた。この写真が鮮明に、かつ裏面に透過しないことなどを条件に、できるだけ上質の紙を用いることとした。また、原稿の執筆をお願いするにあたり、執筆要領は「ばいであ」のそれを参考にさせていただき、原稿用紙は1行の字数の關係から300字詰の市販品を横にして使用することとした。

創刊号は年度の始めにあたることでもあり、新入学生諸君を対象とした内容をはじめその他の記事を決定し、原稿の執筆をお願いした。校正、割り付けののち、やっ

と創刊号を手にする事ができたとき、各委員の方々の並々ならぬご尽力と心よく執筆下さった方々に感謝の気持で一杯であった。

本紙を永続させるためには、年2回位の発行が適当と考えていたが、学長は年4回を希望されたので、まず3回でスタートすることとし、夏休みと冬休みの前に2号、3号を発行することとした。号を重ねるにしたがい、継続的に編集できるようなことを想定しながら、第1面は何にするかを検討し、また、シリーズ的なものとしての「施設紹介」や「研究室だより」のほか、海外出張記なども随時掲載することとした。



委員会の構成メンバーは前記のように全員が兼務となっているので、人事異動によって自動的に交代ということになる。そこで、まず創刊号の発行を目前にした56年4月から教務部委員の碓井先生が小澤先生に、事務局の杉田課長が豊田課長に交代され、さらに6月には学生部長、同委員の交代に伴い、小澤先生から稲森先生に、赤木先生から石田先生にと目まぐるしく交代が続いた。しかし、これらの各委員の方々のご努力と原稿の執筆を心よくお引受け下さいました先生方のお蔭で予定通り3号まで無事発行することができた。

誕生してようやく1年を経た本紙が、本学の発展とともにますます充実発展してゆくことを期待しております。

昭和57年度

各部・各委員会・委員一覧

◎ 部長・園長・委員長 ○ 副委員長
(S57.6.1 現在)

- 教務部 ◎森 逸男(教授)
 稲森 善彦(助教授) 松村 瑛子(講師)
- 学生部 ◎小澤 貢(教授)
 森下 利明(教授) 望月伸三郎(助教授)
 石田 寿昌(助教授)
- 就職部 ◎太田 長世(教授)
 曾根 節子(助教授) 木村捷二郎(講師)
- 図書館 ◎森本 史郎(教授)
 栗原 拓史(助教授) 加藤 義春(講師)
- 学寮 ◎森下 利明(教授)
 小澤 貢(教授) 栗原 拓史(助教授)
 浜中久美子(講師)
- 薬草園 ◎太田 長世(教授)
 小澤 貢(教授) 馬場さみ江(講師)
- 実験動物センター ◎酒井 清(教授)
 森坂 勝昭(教授) 森本 史郎(教授)
 藤田 直(教授) 玄番 宗一(助教授)
 稲森 善彦(助教授) 中元 安雄(講師)
 安田 正秀(講師)
- 広報委員会 ◎森本 史郎(教授)
 森下 利明(教授) 稲森 善彦(助教授)
 浅野 忠行(事務局長) 豊田 忠法(図書課長)
庶務課長
- 研究委員会 ◎藤田 直(教授)
 栗原 拓史(助教授) 石田 寿昌(助教授)
- 大学院検討委員会 ◎堀田 輝明(学長)
 山口 秀夫(教授) 森本 史郎(教授)
 平野 弘(教授)
- 排水処理委員会 ◎水谷 泰久(教授)
 森 逸男(教授) 藤田 直(教授)
- RI運営委員会 ◎田中 千秋(教授)
 森坂 勝昭(教授) 酒井 清(教授)
 井上 正敏(教授) 森本 史郎(教授)
 沼田 敦(教授) 玄番 宗一(助教授)
 木村捷二郎(講師)
- 企画委員会 ◎堀田 輝明(学長)
 森坂 勝昭(教授) 森本 史郎(教授)
 曾根 節子(助教授) 太田 長世(教授)
 平野 弘(教授) 水谷 泰久(教授)
 山口 秀夫(教授) 森 逸男(教授)

- 小澤 貢(教授)
 カリキュラム委員会 ◎堀田 輝明(学長)
 ○森坂 勝昭(教授) 水谷 泰久(教授)
 森 逸男(教授) 沼田 敦(教授)
 玄番 宗一(助教授)

国家試験の結果について

本年度春に施行された薬剤師ならびに臨床検査技師の
 国家試験の成績は次の通りであった。

◎薬剤師国家試験

	受験者	合格者	合格率	全国平均 合格率
第 62 回	296名	273名	92.23%	80.75%
(本学新卒)	280名	267名	95.36%	85.72%
			(全国第4位)	(全国第4位)

※特筆すべきは新卒の女子で受験者 169 名、合格者
 166名、合格率98.22%は全国1位の優秀な成績であ
 った。

◎臨床検査技師国家試験

	受験者	合格者	合格率	全国平均 合格率
第 22 回	29名	18名	62.07%	66.8%

人 事 異 動

実験動物センター

所長発令 (57・6・1)

酒井 清(教授)

退 任 (57・5・31)

森坂 勝昭(教授)

(任期満了につき)

大 学 ご よ み

- 4月12日(月) 入学式
 (入学生: 学部 269名, 大学院 9名)
- 4月13日(火) 新入生ガイダンス 午後アドバイザー
 面談
- 4月14日(水) 午後2~4回生ガイダンス 授業開始
- 4月24日(土) 午後新入生歓迎会(学友会卯月祭)
- 4月21日(水) } レントゲン検診
 4月26日(月) }
- 5月6日(木) } 健康診断(内診)
 5月10日(月) }
- 5月9日(日) 本学創立記念日
- 5月17日(月) }
 5月29日(土) } 単位獲得試験